

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：31301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24500829

研究課題名(和文)「誤った保健認識」の形成過程に着目した高校生の健康リテラシーの分析と改善

研究課題名(英文) Analysis on health literacy of high school students and suggestions for its improvement, focusing on the formation process of their "misperception of health"

研究代表者

小浜 明 (KOHAMA, AKIRA)

仙台大学・体育学部・教授

研究者番号：70170298

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：日本の高等学校における保健科の教科書の重要用語・語句のうち、19個が10年間に亘って一度も新聞紙上に登場していない。また、新聞に頻繁に登場する健康の用語・語句が全く教科書には掲載されていない。フィンランドでは保健科が大学入学資格試験の入試科目になっている。この試験問題を収集し演繹的に分析した結果、試験で検証しているのは健康に関する「理論的な知識、技能的な知識、批判的思考、情報分析能力、自己管理能力、市民性・公民性」の6類型に分類できた。これら6類型は、単独あるいは組み合わせられた形式で出題されていた。フィンランドの保健科では、社会に十全に参加するための能力の形成が目標となっている。

研究成果の概要(英文)：There are 19 terms that never appeared in any newspaper for ten years, though classified as important in high school textbook for health education. In contrast, there are terms that never appeared in any textbook, even though frequently spotted in newspapers.

In Finland, the country that keeps high performance in PISA, health education is included in its Matriculation Examination. A study of the examination papers showed that the examination is designed to measure the following six core components of health literacy: theoretical knowledge, practical knowledge, critical thinking, information analyzing ability, self-controlling ability, and citizenship. These six components have been examined focusing on one, or in combination with each other. In Finland, the aim of health education is to develop students' capability for them to properly participate in the society.

研究分野：応用健康科学

キーワード：保健科の学力 健康リテラシー 高次知的能力の測定 真正の評価 構成主義の学力観 誤った保健認識 素朴概念 フィンランド

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の目的は、近年の学校健康教育においてその育成が重視されている「健康リテラシー」(health literacy)の内容と機能を、保健科教育における教授学習過程研究の側面から明らかにすることであった。その本意は小学生から高等学校までの保健学習を通して、子どもたちはどのような保健科の「学力」を身につけて世の中に出ていくべきなのかということにある。

日本における保健の授業は、小学校3・4年生の体育科「保健領域」で「8時間」が、小学校5・6年生で「16時間」が、中学校の3年間の保健体育科「保健分野」で「48時間」が、高等学校(原則として入学年次及びその次の年次)で「2単位」が、配当されている。保健の授業時間を合計すると子ども一人当たり一生のうちで142時間の保健学習をしていることになる。そのような期間の保健学習を通じて、保健学習が修了する高等学校2年生の3学期(後期)には、どのような保健科の「学力」が子どもたちに形成されているのだろうか。高等学校を卒業後、進学したり、社会に出て生きていくために、どんな保健の「学力」が必要となるのだろうか。研究開始当初、本研究が追究したいとこだわった背景はその一点であった。

## 2. 研究の目的

本研究は、社会の主な変化の動向に着目しつつ、今後小学校から高等学校を卒業するまでの間に形成されるべき保健科の資質・能力に関する観点について、諸外国(日本・フィンランド)の国際調査、及び日本の高校2年生(保健科の学習修了)を対象とした保健科の「学力(リテラシー)」の調査分析を通じて、近い将来に実施される教育課程編成に寄与するための基本原則や基礎的な資料等を得ることを目的としている。

## 3. 研究の方法

本研究課題に接近するため、「研究の目的」「研究実施計画」に照らした作業課題を三つ設け、それらを各年度に割り付けた。具体的には、平成24~26年の各年度、以下の順に進行させた。

## 4. 研究成果

平成24年度は、(1)社会に十全に参加するために必要な保健領域の能力水準を設定するために、T社高等学校保健教科書3冊の索引にある全重要語句が、全国紙A社の過去10年間(2002~2012年)の健康関連記事に登場する個数を数え分類した。その結果、「がん・タール・飲酒・ストレス・インフルエンザ・交通事故・骨折」「体力」「ごみ・水道・下水道・リサイクル・エネルギー、介護・医療機関・保健所・医療費」の語句が上位を占めた。これらは疫学の「疾病発生の三要因」とも一致した。また、新聞紙上に10年間に

亘って一度も出てこない重要用語・語句が19個も指定されていることや、『現代用語の基礎知識』(11年間)の中に頻りに登場する健康に関する用語・語句が教科書には全く登場しないことが判明した。2)一方、PISAで好成績を上げ続けているフィンランドでは、大学入学資格試験(Matriculation Examination:日本のセンター試験のようなもの)があり、その試験科目の一つに保健科の試験がある。しかも、保健科は、一般科目12科目中、受験生が最も多い(受験生に人気の)科目なのである(図1)。ヨーロッパの国々では、イギリスのGCSE(General Certificate of Secondary Education)、ドイツのアビトゥーア、フランスのパカロレアのような、大学入学資格試験が実施されている。しかし、保健科を全受験生が受験可能な入試科目として設定している国は、フィンラ

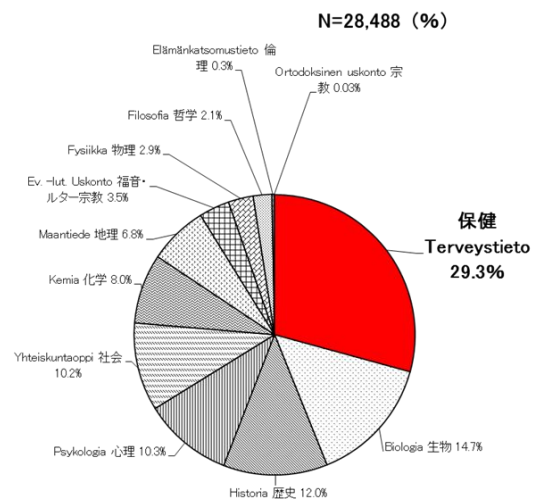


図1 一般科目の教科別受験率(秋/2013)

ンド以外にはない。また、2013年4月に実施された「フィンランド基礎学校学習状況調査」では、9年生(日本の中学3年生)を対象に、外国語科と数学科の試験とともに、保健科の試験が実施されている。ところが、このような実態については、日本の保健科教育研究者の間でも、ほとんど知られていない。この試験問題11回分(2007年春から開始・年2回)を収集し演繹的に分析した結果、健康に関する「理論的な知識、技能的な知識、批判的思考、情報分析能力、自己管理能力、市民性・公民性」の6類型に分類された。これら6類型は、単独あるいは組み合わせられた形式で出題されていた。フィンランドの保健科では、社会に十全に参加するための能力の形成が目標となっている。(3)前述の二つの調査をもとに、「多肢選択型問題(教科書・新聞の上位頻出重要語句を含み日本学校保健会(2004,2010)調査で正解率50%以下の問題)」と「フィンランド型問題(批判的思考を含む健康に関連する情報分析問題 理論的な知識問題)」を作成し、

保健学習を終えた0市内のK高等学校(普通科進学校)の2年生40名(進学クラス)に対して予備的調査を実施した。

平成25年度は、(1)フィンランドが高等学校卒業までに育てようとしている健康リテラシーは、この国の保健科の教育課程、担当教員養成、高等学校の保健科の授業、大学入学資格試験の採点組織と評価基準を背景にして、その基盤の上に成立している。そこでこれらに関わる資料等を収集し分析した。(2)1年目の末に実施した予備調査を分析した結果から、保健科領域における「誤概念問題(多肢選択問題)」、「フィンランド型問題(批判的思考を含む論述型の理論的な知識問題 技能的な知識問題 情報分析能力問題)」と「日本型問題(教科書・新聞の上位頻出重要語句を含み日本学校保健会(2004,2010)調査で正解率50%以下の多肢選択問題)」と「語彙能力問題(標準化された多肢選択問題)」の調査票を作成した。(3)本調査は、前述の調査票を使って、日本の9都道府県(北海道、青森、宮城、福島、東京、千葉、福井、大阪、熊本)の高等学校2年生720名を対象に、保健学習が修了する2月中旬~3月上旬にかけて実施した。

最終年度は、前年度に行った、「語彙能力問題」と「日本型問題(日本学校保健会)」とを比較分析した。結果から今後の作業仮説として二つの課題を見出した。一つは我が国においては「保健の学力」という概念そのものが今回のテストでは測定可能な形で見いだせない、というものである。もし、その原因が高校入試、大学入試といったハイスタークスの選抜制度のツールとして用いられないことに起因する履修事項の定着度の低さに由来するのであれば、教養として必要な領域は全てハイスタークスなテストに含んで問わなければならないという認識にも繋がる。それは、現代日本社会において何が基礎的な学力であり、子どもたちは学校教育を通じて何を学ばなければならないかといった、教育論争の契機となる。他方で吟味が必要なのは、「日本型問題」が、保健科におけるどのような「学力」を測定していたのか、ということの検討も必要である(図2)。

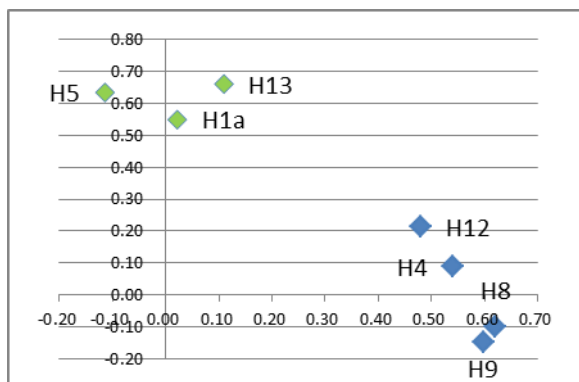


図2 日本型項目に対する主成分分析結果

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計8件)

小浜明(2014)、フィンランドの大学入学資格試験における保健科の試験, 体育学研究、査読有、Vol. 59(2):829-839

小浜明(2014)、「センター試験」に保健科目がある国-フィンランドの大学入学資格試験、体育科教育、査読無、Vol.62(1):44-45

小浜明(2014)、「センター試験」に保健科目がある国(2) フィンランドの保健科の教育課程と担当者, 体育科教育、査読無、Vol.62(6):74-77

小浜明(2014)。「センター試験」に保健科目がある国(3) フィンランドの大学入学資格試験における保健科目の採点と方法, 体育科教育、査読無、Vol.62(8):68-71

小浜明(2014)。「センター試験」に保健科目がある国(4) “Research-based” を特徴とする保健科の教師教育, 体育科教育、査読無、Vol.62(9):68-71

小浜明(2014)。「センター試験」に保健科目がある国(5) “Research-based” の中核をなす「保健科の教育実習」, 体育科教育、査読無、Vol.62(10):73-77

小浜明(2014)。「センター試験」に保健科目がある国(6) フィンランドにおける保健教育の歴史(1), 体育科教育、査読無、Vol.62(12):62-65

小浜明(2015)。「センター試験」に保健科目がある国(7) フィンランドにおける保健教育の歴史(2), 体育科教育、査読無、Vol.63(1):50-53

[学会発表](計10件)

小浜明・高橋悠・石垣信人、フィンランドにおける保健科の学力像- 大学入学資格試験(Matriculation Examination)の分析から-、第59回日本学校保健学会(神戸大学)、平成24年11月11日

高橋悠・石垣信人・小浜明、フィンランドにおける保健科の教育課程、同上

石垣信人・高橋悠・小浜明、高校の保健科における「共通教養」としての「保健リテラシー」探索のための予備的検討、同上

入澤裕樹・小浜明、子どもの「心臓の位置」理解に関するわれわれの認識は正しいのか、同上

宮本友弘・小浜明、健康領域における「誤った認識」の研究、日本教育心理学会第54回総会(琉球大学)、平成24年11月24日

小浜明、フィンランドが育てようとしている保健科の学力-「保健科目」が大学入学資格試験にある国、日本体育学会第64回大会(立命館大学)、平成25年8月28日

小浜明、フィンランドが育てようとする保健科教師の力量-“Research-based”を特徴とする保健科教師養成課程、日本体育学会第65回大会(岩手大学)、平成26年8月27日

小浜明・倉元直樹、保健科の学力に関する

調査研究(1)-日芬における教育課程と学力像の比較-、日本テスト学会第12回大会(帝京大学)、平成26年8月30日

倉元直樹・小浜明、保健科の学力に関する調査研究(2)-我が国の「保健の学力」概念に関する実証的検討-、同上

小浜明、保健科における「素朴概念」に関する研究、第61回日本学校保健学会(金沢大学)、平成26年11月16日

〔その他〕

ホームページ等

研究成果：体育学研究(2014)Vol. 59(2)

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjpehss/59/2/59\\_13052/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjpehss/59/2/59_13052/_pdf)

研究内容：書燈(所属機関図書館)

<http://shotoh.blogspot.jp/2013/12/torch-vol035.html>

所属機関・専任教員紹介

<http://www.sendaidaigaku.jp/teacher/kyoin/kohama.html>

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

小浜 明(KOHAMA AKIRA)

仙台大学・体育学部・教授

研究者番号：70170298